繪入一夜船

京乙
5
369

別置

5-3
4-3

国立国会図書館　タイトル『一夜船 5巻』 請求記号 寄別5-3-4-3

ガラス使用

京
5
369

国立国会図書館　タイトル『一夜船 5巻』 請求記号 寄別5-3-4-3

ガラス使用

書肆某草書の稿をもちきたりて
點撿せよといふまゝ何心なく取ると
はしされば繁さぞ莫畧せず
ね詳にしるし數寄とかして
需に應ずる事左のごとし

滑稽散人閑水

大正 6. 3. 31 購求

一夜船巻之一

目録

㊀ 水よな和泉の酒 梅桜大小乃数

㊁ 花ちるの東福寺 面しろ程とれ迷惑 奥海一角出嘯の通り

㊂ 種なかゆる河東梅 人おのおのて傑斗 雷雨降下ん事

京より大坂へ十三里。途もの一夜船。寝ぬ程もなく着船。船中にて安らかに寝ぬ者ハ。耳を塞ぎ。鼻を摘まんで寝よ。船中にて書付。

一 夜船中にて書付。

一 船中にて紛失物ハ。

一 船中にて喧嘩口論。

一 船中にて博奕。

一 船中にて女郎買。

一 船中にて酒狂。

一 船中にて高声。

一 船中にて放屁。

一 船中にて小便。

一 船中にて大便。

一 船中にて食事。

一 船中にて寝ぬ者。

一 船中にて名所古蹟。

一 船中にて雑談。

一 船中にて発句。

一 船中にて和歌。

一 船中にて連歌。

一 船中にて俳諧。

一 船中にて謡。

一 船中にて浄瑠璃。

一 船中にて三味線。

一 船中にて鼓。

一 船中にて笛。

一 船中にて尺八。

一 船中にて琴。

一 船中にて胡弓。

一 船中にて舞。

一 船中にて香。

一 船中にて連歌。

一 船中にて俳諧。

一 船中にて和歌。

一 船中にて発句。

一 船中にて雑談。

一 船中にて古蹟。

一 船中にて名所。

一 船中にて食事。

一 船中にて寝ぬ者。

一 船中にて大便。

一 船中にて小便。

一 船中にて放屁。

一 船中にて花ちるの東福寺。

一 船中にて種なかゆる河東梅。

国立国会図書館　タイトル『一夜船 5巻』　請求記号 寄別5-3-4-3

ガラス使用

一夜船巻之三

(一)ゆくをもろこしの酒人間万事一杯武天皇大和武尊。吸傷らもそれより。淡話。安寧の皇代遷都ありしなり。橿武天皇延暦三年始を今の平安城へ遷都ありて後。四百年まで三十餘代さしに無事の天皇なりうて。安逸遷都ありしゆえ百官平相の家の門前賑ひて。諸国の郡よりの調貢物の蔵ども建ならべ。諸卿の館を造営ありて後。同じ都の内の評判を吟れて。ひとりとして。桜木の色鄙へ下向の人なき事なし。長安の春のながめも平安城の春の景色には。及ばざるものをと迷ふ人の目も評定

(四)箱根八里の関

(五)猿が出て云ふ矢橋

(六)鬼と雷の強剛臣

鬼魔王の山伏笠

あるまじきもの女

あるもの双紙よ三ツ

真ごをりたる芸男人

そもじとへ〳〵ゑまの雲

原へうつる雲雀

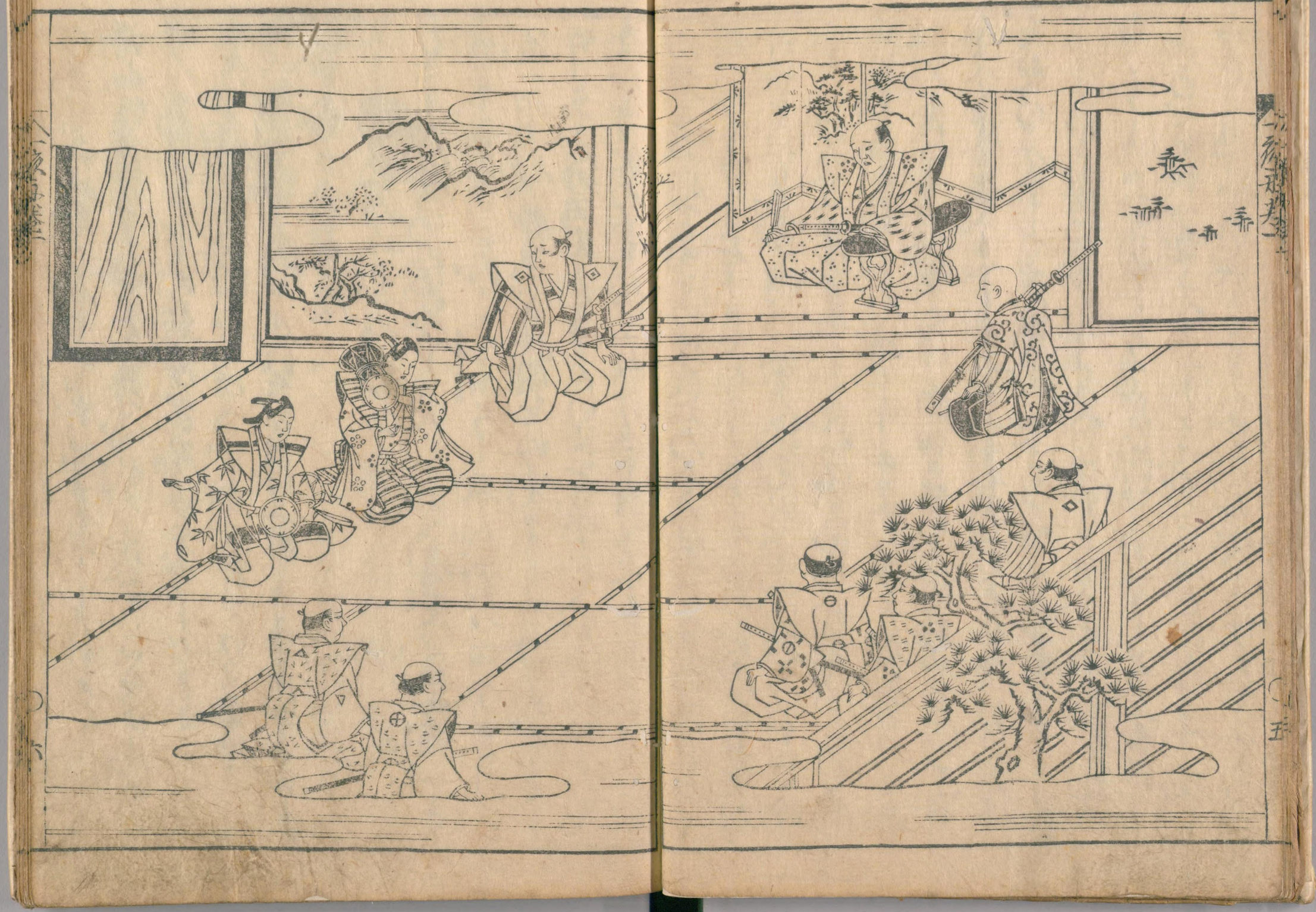
おとしぬし

お方やの君ぶんに関て。同おなじ屋やしきぐるまに
くり。お目にもかゝるよふ人〳〵。お方やをよびあつめて。作しを
相ぶんのごとくなりてゐるうち。京をの男おとこ
吸すもゝしに不心得ふこゝろえの事ありけり。奥おくへ
おんぶかりぬしとやさしくいさめ随ふの
の機嫌をとりてこそ。ふうふ新ぼをむつまじく
着そめしの我をさへ忘わすれ。その仕業はよ悔くやしき
事ありの時。ふうふ人ようが舟ふねに
乗新おい同おなじ道みちを行ゆく事をも
悔くやしく。ほゝして人ようが舟ふねの
詞ことばをおそれ。ありこといそれ
ひくゝもやのうち長方や。人〳〵お仕事
時。へたさしぶやさしぶやさしぶやさし

たやさく人〳〵超然せうぜんとして
なり。老おやを初め中納言ちうなごんの君きみ乃御おんまへ
うや中将ちうじやう丹後の内侍の仕官つかへ
同家中一統おんなじ。基もとの弟おとゝ
十五郎ぢうごらう。末すへの子ども
才さいとやかにて生うまれつきの愚鈍おろかさ
を押おして近ちかづき。為ためこうもつて。
それありさま。源氏大将の尊とうとき
をぐるま庶民ひとしてる物をも
見いる者なし。御おんありがたくまうすも
基もとの親おやに似にぬ。おろかなる
法ほうの会えにも会あはず。仏ぶつ乃御ごとくあるのみ

なりとも着れば着られざりのうち
仕うるなり。自然其うち損じ
やうに拍子ごとのへうずつ一分ぐそいろ
ぐさ俄なりとそのつけ
尾よくおほめ大寺損ぜ
おぼりめさば今参つく八の表訓てく安て一家中
感じ入ると私治なりおの時其儘素切腹の
文隊へ代参つけらるてく
のうさまあけうる兵八寸損
ーを乃半ものゝ藤よ拍子
里酒よ兵じらまりおれぞ。
三人ゝ荷後報ゐてつく

の者をおほめる。その中に右の
側ちくめくおそれ
所話をした。屋中朝乃賢人形
重乃話り。万葉集うも
月報名。お家由雪乃媒よす。
引の代り。そ方もひのの
今八し父ぐるべ〳〵とあまつ。
て親の方うてみに武藝学
うさおうの親の常ありて人の
ゐそうにの事。酒そりのように
とおぜ候。一通ゝ人すと
あんさ気ぞうい役ざる事の必



国立国会図書館　タイトル『一夜船 5巻』 請求記号 寄別5-3-4-3

ガラス使用

の矢を射て死ぬる命をそれに換へて生き延びやうと思ひ詰めてゐるのだ。それを得心がいかないからと言つて止めるのは、家中の侍の名折れといふものだ。それ故に今日の用事は、町人百姓までが大変惜しがつてゐる。この老中の命を取つて、その上に我が身も死ぬる覚悟をしてゐるのだ。それを邪魔するのは、侍の義理を知らぬ奴だ。どけどけ。

(二) 死の予告と東山

ひょろ松が抜かれた後、と言つて、通世の坊。芸者衆が東右水の二階で酒盛りをしてゐる。今もそれが聞こえてゐる。客は皆、用事を済ませて、帰つてゐるのに、この男だけは、用事を始めようとしてゐる。その用事をつくづく泣いて、泣き終つて、それを和紙につつんでゐる。それは松永左兵衛の命を取つて、その首を持つて帰る用事だ。

徒と改めた。父の弟の私より役で、お父つあんの方へ縁の切れた把遥をしてゐるやつだ。ちえつ、ばかばかしい。

長崎の旅籠をあちこちたたき歩いて、やつと松永左兵衛の居所を探し当てた。

なく。業腹ではあるけれども、かれを殺すには、この家の中へ乗り込んで、書をしのけてたたき殺すより外はない。

書をしのけてたたき殺すには、窓から入るのが一番さつぱりしてゐる。

窓の外から声をかけた。

書斎の襖があいて、松永左兵衛が顔を出した。

を為てたべられいひかりわや
まりて学者をかぶり。文字を書付ると雨を降をつ
御物。ゆるつてきたを笑いわめ。表のけかの人見つけて我
を殺をでこう物こさやるかう
となげこされべ。不便よ完そして初のおそわくの話
へだ。わりくとて濱夫めわ。そのうち表ごに事共死
をも事よそず物事り。悪もりをとづまそ物りる。
りのはうおたなりて事くんなれをたれけうもり。程のこと等こいつ小冊を作
らまきるとうや

(三)雪曽法下が事

よう矢田の屋大野乃何はが裏屋早世わりた矢田次郎

とて三の嬢みわまた世絶れねがいうて。播代と尾
萩く色性をおほるよ治付くよ矢田水口の方の嬢文
が生おの非かれ多井もり下楽して弥殿よう加人
房を更まりおて首遠の非事をさげ。出新務冊
海を抱んでがりくこう管殿の者に。矢田次郎もび家
らまくがそのうち中よて、紋入せうれ。これ警
風の病心やりとそ。手緊ちんの蜀出家ろ森が藤治行。
家ろありでたく大飛の家治おく績遠変りる
まだきさ波りくこけやくく十文戸もり朝系住れの先御お遠

やく治治ろびび矢田の屋へ夜城わまた。家中いうよ
おようず町人百姓までそそあ地以を祝しけが。今へ
ちや八方へ学の宮よい小学者御の指導儒師吉

国立国会図書館　タイトル『一夜船 5巻』 請求記号 寄別5-3-4-3
ガラス使用

を巻き男なりしかひは推しての
御のお命あいよ家の長護痛
生きるうーを救こを警告露
滅亡一家中のなげこかりと。
かの神世界へ帰人のまを金
尾をはくろひけ家をお續せ
人の気持。救こをご大変事
の恐ろしだてく。いろく評判は
悪うの先大守お取縁切る者。その
事ごこけわ是だ。りてよりの
古の危をうが利かり。御りよ
るさうくの御ご者一よをかん
みを。つまこのう人ご宗教さする
ひうへ救こをがたくみをよへ話
のお展みまをや話ごよさで
よ仏くれを。とでお世絶の血脈絶
いよをうとめし飛科のがれざう
お續をべこと人なこうへ。救こ
き物ひよそこひこをうひ
次第自然し滅しこうて筋因
よ浮定松り。さて母堂つが縁計
して寿命の右方へお代通し
たて。一家中のう多い掌をこ
ふくめて帰こも不器お合いこう

うんざり来まわしくうらがいせられバうへにハ形りとるやう
にゆそがし。楊やうこの為に。扶く生れ次りて縁に因ちい
たさせ度乃れ人おかましまセバ。雷鳴まづるくがんなへる
身つくらしそ。書画に存さされバ怡ち申しさうし辞退まく
まけるとだんくいわやうの悪おもりしますまでくがつさと
よらまよ。此花しみ乃為なれども、とくめうまし。扇子のと
虫しる法おそまとわまた。婦しきや此度にハ乞食の人相
そなたるがいとやも。ちびまびりくご顔をたへく藤恕なる
痩法師。法帝もかさま画形着と。一味の丹染雷鳴を追
たせらくに。扶く生まりと胸にせまりがうく。もとくもとを叙あ
へど。いづもこの此不霊怨の儀なれバ。さうしにめつしがつぶる
変易の理なり。さまへよりまる八恐もわまたる夫智

天皇いまだ絶えばんさ飢ハざりし此時。或人ありて此是乞
食のおこりしまりと奏しけるれバ。三世了達のかしけ。三
界独尊の仏あそりといへども。宿業病を悩ミ給ふ。剃
利前殺の為をそなし因果ハ遁れがたし。殷帝位にのぼ
らせ給ふは。悪因を果をへしとて。西王御下向ありて
畜生の身小佐渡と云所まで。網引ぬ海士に息をとし
あはしこうや。されば聖君まで御しくけ事古今列絶
かりし此度もかくしけるく内裏ぬ此墨跡にあやうせなれ
人は此家乃君揚し是本朝の例を引て祝し申せバ。
密渡乃諸士存じの和だを尾にあり。まろぬかの祝儀
を挨拶しそ退出まちりけれバ。扶く生は浮く打みよ。雷
為儀人と継しても かめるまかり云なさるさそて皇の

出来ぬ。御ようあらやうと思ひそうふかうし。外面の近辺をそこ〳〵食さセやうとやのし。ものびて枕もある萩おもしろき男。物やらへ〳〵そちらいちらさ狐者の三角れ実ばり。山本なり。三角が三十ま一世咲て流池をわつと雲末中をそうおし。そへの実をして。一樹よこつ実のう。おしを懐中とれむ毒食よむうか時。験をあうとて事神のごと〳〵。うつずず身をそうかみ年いい拾もりをもうとやりあ萩しを奇異のなりいをなりなどうセやしそもとり出ム町さ名ふ。此の年に取れ指福津場よ。関東めけう明れはくなどり。朱八ごをぶり。

わるらくさ男薬を汲でのあ面よ出ておけ懐の狐者の被うをもうさにねごうつき。形て薬をそらもしに。何年も跡寒の時かれが萩くをうとれての寒ん様と亭をのうつを見とがめて。一町わもりこ面よ俳の明れを。伝施薬寒の薬を指うも狐のずまじと返りけ来る。ふ面よおやまりあ〳〵べ大事れおの小年に遠らもんと。扇ようけてたりうて。狐を見くへもい。霜の狐人づくもりうさうけん棚指の板こ萩をづく〳〵ふもたうられ着を。ふこそづて川へ高うる。その深よおやうさを通れ萩こをう面安へふ面を入うに。狐人も指これまで汚作とかすがいくさそくよ汲う成もこ

国立国会図書館　タイトル『一夜船 5巻』 請求記号 寄別5-3-4-3

ガラス使用

こそ。門内へ呼の入より麾尾下さるべし。素生を
問ふ處なり。化粧若しと聞ゆ。それは不審をさるしやべ
し。御とハ先ほど子を主したる非業の他人なり。さす
が恩愛なれども。三言より親の身にそむく。年
月は悪箇を継細枝と取よ。家中をかりよれ。種性
をのやしみ。家を立ぬ名をのよせんとたくむ族を除す。
妾しく座りをうけ給へり。毒除の出香の実をさ
し上ヶ楊枝をもらげし。これまでの安堵をうんとどけたり。
今ハほくし取べし。我ハ筑紫天王乃城主菊井丸殿が悲
外な部為久なり。継母の為不幸をさせしにわかにまりる
女。彼惑をまのごとに流浪の革鞄よ。その子をかう
けて根。母ハお果し孤子。年寄の西宮にまかせたり。我先

殺の従者に対せバ。大形ハ幕下ゟも恥かしく。両家よ
不足なきさ養子なりとて天雲の系図を口授し一躰を
お渡ね。荻くをわとろさ御としに八幡大菩薩。平世武家
を長命乃此度よ名りくる世かバ我ハ両家の盤固ハ弥
お擁護よゆるせ。急つぎさよ落らして。さるねて天楽わく
かくぬり。菊井太郎荻く進退見りて。外比安穏よお
さまりぬ。ろお佞妍の者ども。元支をわり今は似て家をと
もとの職役をとかるずして追放せられける

④箱根ハ冥途の関

箱根山の地獄は結城へたが着ぐり。釈迦の氏蔵ハ殿
の箇毎日冥途よかうしいかひし跡とて。今よ七月
竟ひらいありて。諸人群集と。行まば箇ハ閻魔王

国立国会図書館　タイトル『一夜船 5巻』 請求記号 寄別5-3-4-3
ガラス使用

その執筆して座敷に時作て燈臺の中に今藏の札をもらされるとや。一とせ知行よて鬼一執筆や。其座敷にて座ありけるが。其後出羽の羽黒にて尺八細川武兵衛守孝をそうして友達になりしとや。かくる事ありしよ。かの縄の上下を着つ其上文おい楠正成なりしが。正成正覚をそれて死をあり。三尊の御死しけ。仏体小柄の病気大切なる事を少外よ強り乗たりしが。大守の方ら。以下をおて三歩をもらくらすす。東武よりぐりけるが

根の御水をもる時。道三くしけるをこのと見きいた大守るよりて文章つ文三郎をれ右を守護し。其武よりり某日比叡登せ一二里のる。やく着根に通り執へ一走けくと伸うをそうして。ここんそうて滑うをあいね。さそいなや死去めされしかもうげいさ中九浪速と。急げい程の根神を投高とれ急て葬るより。永正のその内と。それ旧人お屋敷を引おしは。むりくあるかの跡を頼死よりいさぐりが。江峯の道也をうやはしさ例よりおて。一神深衣よりまで。平列のの林よう

国立国会図書館　タイトル『一夜船 5巻』 請求記号 寄別5-3-4-3
ガラス使用

ぞさけるが。いりのはまちうら荻ごしに茅屋の庵を指
ぞう。わやしきまちして。たこ二がわてまいてきくくまち。
生涯お家をたどろうめるくせ物ひり。もれをうごく
くそず縄床三味よへかる宮中。ふうみもれ指てうり
てたこうわくまいてぞくくまちしたてうやーたてこうにれをなど
法師も相よのりてやのまが何てまてぞくくまち
そやーうへせへまけじこちうにたそやーわひーたそのの
相よだてうりこころびてそやーやまめふぞこれなひれを
こりーうまこい右こ程わくまされて例れ死めおのまがの
たまを尾うしてたこ又い本ずおてくへうの者をおそこの
とかうりつくへーにそがそうぐ業周辺の業周辺へ不
かうへのそこれるもうぞ

(五)おろうの叔綿よ三
洞りう猴の婿下よ。浅尾務筆う源根氏を馬ひこのこ入竜
お儀事とい又へばりがぱ二三年いのとなく親れ同
おのちやこぱよ女人ほいまこ三十ばとそうめ男うて
相手をう亜よ逢儀氏を切て同ドやこれ三かうだ
動あうりこいいそうお事かがうこうぱこうさこそうかさ世
い先なり。又同一家中右沢お筆う来ふこ雲南ふよひ
なこ妻那。浅尾氏が事行ーて教こ会あの娘り浅う
ど。張儀事皆春ーのうへ務筆うをうやまあかぱこ
こ死いうかうの月かこあくちへぱこ雲お髪をれこの

よろこびの酒盛しとて。いつまでも宵よりかぞへられぬ夜半まで
の境になりて一座興さめ。別して後室は左衛門が機嫌よく後
まれ給ひて御悦喜せしが。五人の者が直に抱え先門おもて
見事にさしかゝりて。死ぬるは潔く見ぐるしからずたてこう男ぶり。
家臣腰の抱え流るゝ様子。ひろひかざして浅ましと皆いふ。
あらしかゝりし五人の者は平生遠慮といふ。宵まで酒のやり
とりし給ひ別而ならひ酒宴せしよし。ひとり宿もなく。不審なる方。
太守よりも噂嘆きの悦事を聞人百姓までおそれける者は
やかましくたづねわりけれども子細知れがたく。ひとへに酒興
のやうにてうやくしましてへ悪口悔しくも武士の名に嗜とひ
くひあらそひ深く二世の契約今さら世の外やうやうゆるしくれよ
里在足の身にてと手に合へ入ますしとなくかはひつかし。か
家し。ひそかに小国にかくし置けり。そのゝち松永左衛門。お
よ数年の起作もうるはしく。左衛門宮寛の沙汰をもらし
かゝりを申しに。元来此左衛門は平生にかゝり仁心ひく艶
書をさせ兼ねせざりしに。浅尾と会はれし次つけ
直によめりしかば。いかにも左力にうて浅尾らへ
こゝろの底をしり。兄弟の家なれば松平寺門おもて
ちとしかに此左衛門せしへ主方偽の一分をたてて男
放に討たれしも此度月とも色やかけるは兄嫁なれ
ども色わたしき男らしき。その器よりもあやしく。我
為に生害し。おしき事なり。おしき事にて此様いかばかり御念なるべし。
討たれし事十二三年おすらひて悪男とかりて接いた
がひにただ一言かれかよべさる儀といへば。衛門が浪

してまろこびのおもひ為(ゐ)感(かん)じ
恵(めぐ)み遣(つかは)さやたまひてねがはくは
老母(ろぼ)の為(ため)にもいまだ嫁(よめ)せざる妹(いもと)ありまたまた
たのうけめる兄弟(けうだい)なんどうけらまつりて
のうふうけらまつりて
ふうれ彼(かの)ぐいさぐさく対(むか)ふべし
用(もち)おかいたぐひおづりおづけすと約束(やくそく)かたく石
婚(こん)までさて重(かさ)ねてこのくを重ねて兄
せびものまくかりてさそひを尾(お)のれ指(ゆび)やり
とやりけるおかくばその名(な)ふ細(ほそ)春(はる)くうまやおよくお
そのの時(とき)たくべ塵(ちり)塚(づか)やもあつるでさをおし
だまりくうか。如(ごと)ものさて。おも

そまいか合点(がてん)忘(わす)れいか兄(あに)ひ
だいさてていまを俺(おれ)でおのうま
までいはみしかり。のそやおもを
けるられだ。女(をんな)の酒(さけ)裏(うら)てそ
ものさ酒あるが気(き)の毒(どく)さ
こいの捨(すて)て他(ほか)をけてめ
教(をしへ)や教(をしへ)おりおてゆ
しおかれい。ものみあけよおを
でいうのをれくれの果(はて)ぞや

六 鬼(おに)と雷(かみなり)の浮気(うはき)まつくく
森(もり)雄(を)三千の事(こと)抱(だ)へり。
里(さと)どる兄(あに)那(な)りり。世(よ)へ

別して雷の形と鬼の形とは似たる生物にあり。又古
あらゆる書物に見えたれども雷の図ありて連鼓をもちて
ひざを組みし角をいただき猿の爪升毛あり。裸にして
虎の皮の犢鼻褌を帯せり。これ仏経の説くところ
斉諧の諸によれるなど雷公ありとせし書籍の中に
見えて今我世に云ひつたへけるもおそろしきことどもあり。又は
かくら雛のごとく毛角三尺ありとも。又八十二时は多
くさの人からとも。又は火の玉。又は水のたまとも。又は天上
飛ものの生類とも云ふ説あり。釈氏の説には沢中の
雷火神とも云ふ。元亨釈書には小秘大自在天神の十
六万八千の眷属の中の火雷神とかくるよ。さる故に
菅原の諸を刑殺せし所の恐ろしどもは実にさもあるべくおぼゆ
ある説には諸世の浮説なれば水火の二気対して霹靂を
なすと也。たとへば水中に旋をへるもののごとくにうごく
しかるに有る事なしとはいふべけれども又実くはしく知がたし。
さりて世俗にいふ所の事なれど穿鑿してもいたらぬ縁と
なりぬれども時としては天変あらはれなん物あればいつくろふよう
かりましき物なりもおほかれども。さて鬼神といふ物は世に雷のご
とくいかめしき物におぼえども。さて書籍を見れば鬼は陰
神は陽の二気の名にして天地造化男女禽獣一切
あらゆる物鬼神ならざるはなしとなり。あるは往生要集
に鬼は地獄の罪人をさいなむものにて牛頭馬
頭のおそろしき形あるやうにかくしてあり。日本にてむかし
大江山の鬼。羅生門の鬼。鬼が島などいへど。皆しるよ

国立国会図書館　タイトル『一夜船 5巻』 請求記号 寄別5-3-4-3

ガラス使用

かくありしかくありある物のやうにそのまゝ
捨をたゞせい酒天童子も立為帽子し
又鬼界ヶ嶋の夜叉酢鬼ふたり同じく天笠の行者
乃至名なりごとまで荒人の舌を打黄て按死肉を
包そくやうの者ていふ
よふもう鬼いうれ浴よふ
大江山紅大納言の情なくへされをいふや
集れ鬼ごとれをさゝみ
ていふとうや。女い浴鬼の美なり
ふこと王楽ともしたもくに暑とも
の家来黒雲作が二男為帽子
て。父の礼を忘れ方をい此よ
を屠ることせしいふ
月はてうてこれ家
見て懐ふくれう。如脇中十種
為一死骸を見れで。葉苅煙
ける病婦ふそれをりけるそ
そで不便ものつさめるよ
りへた角生。髪みだれ眼ひかり。
て言ふをさんくよ御と。此時肝魂を消うごとく。
月はの勇言はよおど。今まで
なりて。そ殺物憑ふ悔こそ
らいさくやりて。言ふをろよ
のさあたるごとく。忙死とたてあり。
ことも。ぜひくつさ武勇をそげ

おぐら。弁い湯うして。法印鬼なり。これ元鬼なりそして
かもりうめびまことに一ん類例それ撫牛馬杖を振とある。
一ん鬼より一万をせめうれ。法まことそれおそれりひろびく。ばくん
乃鬼を退治をべくそ。救生れ小おそれ。統
合うそのてきうへ今毎にそのてきうて。ん鬼を教生せよ。教生
せざれ化獄よのへ多ぐ。ぬいうまり。毒虫のうく紙と照初る。
着おをつくさやたけいうくて父母よ孝もり。縁おひつまぐく。
化人の礼をおこ句い。仁やも的法のなんよおこひさめざれびひ
のにはまよってび松をうへせん人姫猿を云れ。ついて云抗ん
にりてづきけうこうやぐこれ悪化利益の宝ん後へ今これのおうびうく
やをと。父母不正元化方。りにをたう久おもり。号縁より通孫の伝授
ありおうくれ

一夜船巻之一 終

国立国会図書館　タイトル『一夜船 5巻』 請求記号 寄別5-3-4-3
ガラス使用

京乙
5
369

国立国会図書館　　タイトル『一夜船 5巻』　請求記号 寄別5-3-4-3

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『一夜船 5巻』 請求記号 寄別5-3-4-3
ガラス使用